

ご家族の方へ

旅立ちまでの身体の変化と対処法

ここに書かれていることは、患者さんの死の前後に見られる身体の変化を書いています。これらの変化は、全てが見られるわけではなく、また必ずしも書いてある順序どおりに起きるわけでもありません。旅立ちまでの身体の変化は、人によって様々です。大切なことはほとんどの変化が死に至る自然の経過であり、ご本人にとっても苦痛なことではないということです。

1. 死が近づいてきたときの状態

- ① 疲れやすくウトウトした状態が強くなり、眠っていることが多くなります。但し話声は聞こえているといわれています。
- ② 食欲がさらに落ちて、食事の量が減ります。水分も口に入れることが難しくなります。
- ③ 時間や場所について混乱がみられ、時に知っているはずの人が分からなくなります。
- ④ 時には不穏状態となり、奇妙な動きをしたり大きな声で変なことを言ったりします。
- ⑤ 嘔吐、吐血、下血、便や尿の失禁がみられます。
- ⑥ 唇は乾燥し、粘着な分泌物が口の中に溜まって呼吸とともにゴロゴロという音がします。
- ⑦ 手足は冷たくなり、皮膚は蒼白でまだらになる。身体の下になった部分は暗赤色になり、出血傾向も出てくる。
- ⑧ 尿は少なくなり、時には全く出なくなります。
- ⑨ 呼吸はだんだんと弱くなり、胸や腹の動きが彼のように大きくなったり、小さくなったりします。時にはいびき様になったり、不規則で10～15秒くらい止まることもあります。最後には下顎を大きく動かすような呼吸になります。
- ⑩ 39℃前後の発熱が見られます。（解熱薬はあまり効かず、クーリングが必要となる）

2. 実際に死がおとずれたときの状態

- ① 呼吸が完全に止まります。胸や顎の動きがなくなります。
- ② 手足が冷たくなり、先の方から徐々に暗紫色に変わっていく。
- ③ 胸に耳をあてると心臓の音がなくなります。脈がふれなくなります。
- ④ 揺り動かしても、大声で呼んでも全く反応がなくなります。
- ⑤ 眼球は固定されて動かない。まぶたは開いていることも閉じていることもあります。
- ⑥ 尿や便の失禁がみられることもあります。

3. 亡くなられたと考えるときの対処（ご家族だけの看取りの可能性が高いです）

- ① あわてて救急車や警察を呼ばないで下さい。
- ② お体は2～3時間はかたくなったりしませんから、ご本人と充分お別れをしてください。亡くなられた時間を覚えておいてください。
- ③ 医師または訪問看護師に連絡して、わからない点についてお聞き下さい。
- ④ 医師や訪問看護師が伺い、医師が死亡確認をします。
- ⑤ 訪問看護師は、ご家族とご一緒にお体をきれいにさせていただきお手伝いをいたします。
- ⑥ 死亡診断書は、診療所にてお渡しします。（火葬許可書を受け取るのに必要）
- ⑦ 麻薬が残っていましたら、薬局にお返し下さい。